

二人のアラブ人作家による「アメリカ」

八木久美子

アラブ世界の人々にとって、アメリカとは何か。アメリカは、彼らの前にどのような姿で立ち現れるのだろうか。時代によってアメリカが持つ意味はさまざまに変化してきたが、現代のアラブ世界の人々にとって、アメリカは、最大、最強の「他者」であることに間違いはない。アメリカに向けられるのは、自分たちが持てない富や力を持つ者への憧れの眼差しともなれば、そうしたものを独占する者への強烈な憎悪の念ともなる。どちらにせよ、アメリカは強い感情を向けられる対象である。

文学の中にもアメリカは登場する。ここでは、ユースフ・イドリース（一九二七―一九二）とアブドゥル・ラフマーン・ムニーフ（一九三三―）という二人の作家の作品を挙げることにしよう。そこに登場するのは、現実のアメリカ、あるいはアメリカ人を忠実に描写したものではなく、作者が意図的にデフォルメしたアメリカである。社会派の作家たちの目を通して描かれるアメリカの姿は、誰しもが直接、間接に知っているであろうアメリカというもののひとつの解釈を提出している。

アメリカという娼婦

ユースフ・イドリースはエジプトのカイロ大学の医学部で学び、学生時代には学生連合の書記として左翼政治運動に身を投じている。革命前の

エジプトで国王の腐敗振りを公然と批判し、二度にわたって拘留された経験がある。一九五二年に自由将校団の革命が起きたとき、インターン時代の彼はこの革命に大きな期待をかけたという。しかし、革命政権がその抑圧的な支配を明らかにするにつれ、彼は批判的な意見を表明し、政治犯として逮捕された経歴を持つ。作家としては、抑圧された者の権利を主張し、民衆の視線から書いた短編小説によって評価を確立した。エジプトの思想界においては、左派を代表する人物と言ってよい。

ここで取りあげる『ニューヨーク八〇』(Niyu York 80, Cairo, 1980?)という作品は、自らのアメリカ滞在中の経験を基にして、アメリカという異文化との出会いを描いたものである。六〇頁ほどの短いものであり、また彼の作品としては完成度が低いが、そのためにかえって彼のアメリカ観が直截に表明されているとも言える。イドリースは一九五九年に、『マダム・ウイーン』という西洋での経験を基にした作品を発表しており、『ニューヨーク八〇』はそのアメリカ版である。これら二つの作品の間にある差異は彼が西洋とアメリカの間に異なる眼差しを送っていることを示しており興味深い。それについて論じる紙幅はない。ここでは、西洋に対する彼の批判がアメリカに対して向けるほどの厳しいものではなく、一定の評価がされていることを指摘するにとどめよう。

ニューヨークを舞台としたこの作品のなかで、主人公のエジプト人作家

が会おうのはひとりのアメリカ人娼婦である。歩き疲れてバーで休憩していた主人公は、贅沢な身なりをした娼婦に誘われる。彼女の姿を見ていて、主人公はエジプトの哀れな娼婦たちを思い出す。彼女たちは何らかの事情で家族のもとを去り、粗末な服に身を包んでその日の糧を得るために身を売っていた。彼女たちはいつもバッグにヨードチンキの濃縮液を一瓶、携えていたが、それは万が一警察に捕まったら、すぐにそれを飲むためだった。飲めば命を失い、身元が明かされないまま卑しい生活から解放されるというのだった。

それに比べて、このニューヨークの娼婦は指に高価な指輪を光らせ、バッグには最高級の香水をしのばせている。彼女は生きるために甘んじて卑しい生活をしているのではなかった。娼婦は悪びれることなく、より多くの金を得てより贅沢を楽しむため、身を売ることの何が悪いのかと主人公に言い放つ。主人公は女に言う。

「あなたはまだ自分にも何らかの考えがあると、私に信じさせたいのですか？あなたの言うことを聞いていて一番恐ろしくなるのは、そのなかにある種の恐ろしい崩壊があるのが私にはつきりとわかるからです。あなたたちの文明とは言わない。この文明、いやどの文明でも最も大切なものは女性です。あなたのような女性は、精神的にも知的にも哲学的にも破壊者です。僕を驚かせるのは、あなたのような女たちが客の男を見つけることができることです。優れた社会とされている（アメリカという）所で育つた男たちなのです。男と女の関係が原始的な、汚い売買の段階をとくに超えているはずの。・・・二十世紀後半の世界でもっとも秀でていているという国に暮らす男が、いったいどうやって女性を、女性の肉体を、その女

性の感情を無視して自分のものにするなどできるのでしょいか。内も外も裸になることを受け入れるがための代償が、男が代金として払う何ドルかなんです。僕は、科学を進歩させ月まで到達しながら、身体に関しては奴隷の感覚に沈んでいるような文明は嫌いです。そして、あなたのような女性には嫌悪感を覚えます」（三〇頁）。

主人公が頑なに女の誘いを断ると、その夜、女はホテルの彼の部屋までやつてくる。彼女は自分が実は精神科医であると言って、有名な病院の身分証明書を見せ、話がしたいから部屋に入れてくれと言う。主人公は好奇心から扉を開け、二人の間で奇妙な会話が始まる。人間の尊厳、あるいは身体と魂の聖性を信じ、生活に不自由のない教育ある彼女がなぜ売春をするのか理解できない主人公と、物質的な豊かさだけを追求するこの女性の間には、一致点はまったく見つからない。彼女は精神科医として行う男性の不能治療と売春という行為を、実質的には同じものと考えていた。同じことをしてより大きな報酬が得られるのであれば、売春の方が効率的というのが彼女の論理だった。

彼女―「最高のもの、崇高なもの・・・そういう言葉・・・よくよく知っているわ・・・ただの言葉ね・・・あなたと同じように、私の叔父さんたちや、近所の人も言っているわ・・・いつも背中の後ろで、恥知らずとでもいうかのように・・・最高の、崇高な、より高い所まで進化した存在・・・でもなぜ、あなたの考える進化しかないのかしら？私の考える進化というのはなぜないの？」

彼―「あなたのいう進化とは何なんです、ダーウィンさん？」

彼女―「私にとって最高のものとは、できるだけ少ない労力で、できるだけ多くのお金を得ることよ」(六二頁)。

医学の博士号を持つほどに教育のある彼女は、作家の主人公と互角に議論を交わすが、彼女には主人公の精神論がばかげて聞こえ、主人公にはこの女性の生き方が動物以下のもに見えるだけだった。二人は関係を持つことも、理解しあうこともなく終わる。

この娼婦の姿は、教育も経済的なゆとりも、そして高度に進んだ工業化も、自動的に人間を動物とは違う高みに引き上げはしないというイドリースの信念を裏づけるものである。アメリカ的な価値というものは、行き着くところ、この娼婦のような金の奴隷としての生き方しか生み出さないというのだ。彼女には、身を売らなければ生きていけないエジプトの娼婦たちの悲しみも屈辱感もない。彼女には、人間としての尊厳を守ろうとする意志がもとよりない。アメリカとは、イドリースにとって、物質的な豊かさを最高の価値とし、それを超えた人間的な価値を持たない社会を意味した。

オアシスの破壊

『ニューヨーク八〇』がアメリカを訪れたアラブ人の目から見たアメリカであるとすれば、『塩の町―荒野』(Mudun al-Milh, al-Tih, Beirut, 1983; 1992) はアラブの地へやってきたアメリカ人たちを描いたものということになる。作者のアブドゥル・ラフマーン・ムニーフは、アンマンで生まれ、バグダート、カイロの大学で学んだ後、ユーゴスラビアで石油

経済について学び博士号を取得している。長く石油経済の専門家としてオベックなどに勤務した後、八〇年代から執筆に専念したという経歴を持つ。『塩の町』が、石油経済の専門家としての経験をもとにした作品であることは間違いない。この作品は五部からなる大作で、第一部の「荒野」だけでも五八〇ページにのぼる。舞台となった場所の特定はできないが、石油採掘が始まった当時のサウジアラビアを思わせることは確かである。彼の作品には、アラブの抑圧的な政治権力を批判したものが多く、この作品においてもその色彩は強く、『塩の町』はサウジアラビアでは発禁になっているという。

物語は、石油採掘を目的にアメリカ人がやってきたことよって、古きよきアラブの生活を象徴するオアシスの村、ワーディー・ウユーンが破壊されることから動き出す。アメリカが壊してしまったものとは何か。まず、このオアシスの様子を見て見よう。

それは過酷な砂漠のなかに突如として姿を現す、豊かな水と緑を誇る楽園だった。砂漠を横断するキャラバン隊にとって、ワーディー・ウユーンは「初めてそれを見た者には信じられないような奇跡であり、不思議なもの」だった。一度見た者は忘れられず、旅する者は、このオアシスに行き着くまであと何日かかるかと指折り数えた。水が豊かにある年には、ワーディーの人々は、途方もないまでの歓迎ぶりで旅人を迎えた。

彼らは旅人にできるだけ長く滞在しろと言い張り、与えたものに対する代償をいつにもまして強く拒み、旅人が出発を延期するよう、なにかと口実を作り出した(二〇頁)。

彼らのあまりの寛大さは、ときに他所から来た人々の失笑を買うほどであった。彼らは雨の降らない不運な年にも旅人を拒むことはなく、ただ限られた水がなるべく減らないよう、旅人が行過ぎるのをじっと待った。彼らにとつて、水はだれもが分かち合うべきものだったのだ。

このオアシスの村の人々の心のよりどころとなっているのは、ムトウイブ・アルⅡハザールという男だった。彼はオアシスの歴史を誰よりも知っていた。近くに住むイブン・ラシードのもとへ、「水を探している」という外国人がやつてきたとき、オアシスの未来に暗い影が指していることを誰よりも早く察知したのも彼だった。本当にその外国人が水が必要としていたのであれば、彼は他の旅人と同じように温かく迎えたことだろう。しかし、その外国人の行動を見守っていた彼は、「水を探している」という説明が偽りであることをすぐに見破った。

キャンプが造られた後、何週間か、不安な混乱した状態が続いた。アメリカ人たちは、毎日、真昼間、太陽の下でうつぶせに寝転んで過ごし始めた。ショートパンツ以外、何も体を覆わずに。男たちであろうと、子供たちであろうと、周りに誰も人などいないかのように。まるでテントのなかにでもいるかのように（七九頁）。

彼はできる限りの手を尽くして、この傍若無人な侵入者を排除しようとするが、周囲の理解が得られぬまま、彼の努力は失敗に終わる。エミール（首長）は、彼らが人々に富をもたらさずと言つて、ムトウイブをなだめようとする。絶望した彼は、妻や息子たちを残し、オアシスから忽然と姿を消す。

その後間もなくして、このオアシスの村自体が姿を消すことになる。石油採掘のために、人々は立ち退きを命じられ、木々は切り倒された。再びそこを訪れた旅人は、その場所がかつてのワデー・ウユニーンであるとは、すぐには理解できなかつた。オアシスを去つた人々は、ムトウイブの警告を思い出し、彼のことを記憶し続けた。

砂漠の中のアメリカ

舞台は海岸の小さな村、ハッランに移る。かつてわずかな住人しかいなかった海辺の小さな村が、石油採掘、積み出しの基地となり、急激な変化を経験する。各地から労働者が集められ、そのなかにはムトウイブの息子たちもいた。ハッランを激変させたのは、各地から仕事を求めて押し寄せる男たちの波だけではなかつた。基地建設のために、それまでにあつた小さな家々は保証金と引き換えにことごとく破壊された。人々は「粗末な小さな家が壊されるとき、痛みと悲しみを感じた。」ハッランは誰の目にも新奇な世界となつていった。

労働者たちは、最初の給料を受け取り、それまでに見たことのないような大金を手にした。彼らをここまで連れてきた自慢のラクダも、もう必要がないものとして、売り払われる。この決断は悲しみを帯びた、どこか割り切れぬものだった。

だれもが一頭のラクダを買うために、奔走し、身を粉にしたのだ。もし今日、それを売つてしまえば、代わりを買う機会はその簡単には来ないこととは分かつていた。要するに、ここにつなぎとめられ、長い期間、おそら

くは永久にここに留まることになるのだ（二七七頁）。

彼らがラクダを売ったことの意味は大きい。遊牧民ではなく、オアシスの住人であろうとも、男たちにはより広い世界を見たいという移動への憧れが常にあつた。抑え切れない気持ちに掻き立てられ、母親の悲しむ顔を振り切るように、何人もの青年がキャラバンに加わってワーディー・ウエーンを去り、そして大きく成長して帰ってきた。石油会社に雇われ、ラクダを手放して自由に移動できなくなった彼らは、かつてのワーディーの男たちではない。

アメリカ人を乗せた船は、ハッランにさまざまな見慣れぬ物を持つてきた。ハッランには二つの新しい町が造られた。アメリカのハッランと、アラブのハッラン。アメリカ人のハッランは、着実に規模を拡大し、設備を整えていった。プールができ、エアコン付きの住宅が次々と造られた。木陰を作る木が植えられ、カフェテリアも整備された。それらはみな、新しい機材にうるたえてアメリカ人の嘲笑を買った、あのアラブの労働者たちが造り上げたのだ。しかしアメリカのハッランは、鉄条網で囲まれていた。

贅を尽くしたアメリカのハッランは、粗末なアラブのハッランと対照的だった。それでもまだアメリカ人とアラブ人の関係は、悪くはなかった。有力者の結婚式に呼ばれ、アラブのハッランを訪れたアメリカ人たちは、初めて見るものひとつひとつに歓声を上げ、さかんに写真を撮り続けた。

しかしひとりの労働者が港での工事中に水死した事故を契機として、少しずつ状況が変わってくる。会社は契約の条件を理由に、賠償に応じようとしなない。アメリカ人とアラブ人の関係とは、もはや「人事課」を通じた事務的な手続きでしかなかった。水死した男の家族は、復讐を誓いな

からハッランを去った。職を斡旋し、彼らをアメリカ人のもとに連れてきたイブン・ラシードは恐怖に怯え始める。彼はそれまでの尊大さをすっかり失い、犠牲者の一族がムトウイブ・アルハザールと一緒に復讐に来るのではないかという恐怖心のなかで死んでいく。生前、決して評判のよくなかった彼の死が、それでも周囲の人々に悼まれたのは重要だ。彼は不当に責めを負い、アメリカ人の罪を贖つたと考えられたからだ。「アメリカ人が彼を殺したのだ」と、彼らは感じた。「アメリカ人は神を知らない。アメリカ人は主を持たない。彼らは『仕事、仕事、アラブは怠け者だ。アラブは何も分らない』というしか知らない」（三八六頁）。

ハッランの富は、野心に燃えるさまざまな人間をひきつけた。西洋で教育を受けた医師のスプヒー・アルマフミルジも、その一人であった。彼はすべてのことを冷静に計算する男だった。たとえば彼にとつて友人を作ることとは、単に負担を増やすことでしかない。彼はすでにハッランにいた治療師のムファッディ・アルジェダーンとは違い、目新しい器具や薬を使って病を治すことで瞬く間に町の名士となった。その病院には、「スプヒー・アルマフミルジ博士、内科および外科、内臓疾患および性病専門、ベurlin大学およびオーストリア大学卒」という看板が掲げられた。

ハッランの富を目当てに、商人もやってきた。レダーイーはエミールの歓心を得ようと、贈りものをした。次々と手にする目新しいもの、望遠鏡、ラジオ、自動車、電話の魅力はエミールを夢中にした。ハッランの人々の生活を守るといふ、エミールの本来の務めは忘れ去られた。ジャウハルという一人の兵士が警護長となり、横暴に振舞い始める。

「治療師」ムファッディ

こうして、医師のスプヒー、商人のレダーイー、そして警護長のジャウハルが急激に力を得ていった。アメリカ人が作ったこの町で、新しい文物や知識を武器に、彼らは成功の階段を駆け上がって行ったのだ。しかしその陰でなにかが壊され、抹殺されていった。それを象徴するのは、医師のスプヒーの登場によつて、邪魔者扱いされ葬り去られる治療師のムファッディである。

ムファッディ・アル||ジエダンはスプヒー・アル||マフミルジー博士がやつてくるまでは、ハツランにとつて、ただ「治療師」であるだけではなかった。いわゆる、「なんでもや」でもあった。彼の薬や治療を必要とする者がいないとき、彼は家々に水を運んでやつた。それに飽きるか疲れるかすると、漁師を手伝つたり、しばらく船に乗つてみたり、どんな名前もつけようのない、どの職業にも入らないようないろいろな仕事をした。食べ物をもらう代わりに舟の漕ぎ手もやれば、とにかく頼まれるとなんでもした。再び岸に戻つてくると、建築現場で手を貸したり、石切り場で手伝いをすることもあった。ラクダの番もしたし、草刈りにも行った。よくあることだったが、こうしたことになら飽きると、驚くほどたくさんウサギや野生のヤギを捕まえてきては、気前よく人々に与えた。自分には何も残さず、自分はその味を楽しまないこともしばしばだった(五〇八頁)。

ムファッディは一日たりとも、金のために働いたことはなかったし、金への軽蔑を隠そうともしなかった。礼を受け取るために仕事をすることも

なかった。誰かが彼に支払いをしようとすると、それがどれ程の額であるにせよ、彼はとても怒った。そして彼の口からこういう言葉が出た。「ハツランの皆さんよ。いつかあんた達が水を売る日が来る」(五〇九頁)。

彼はたしかに、一風変わった男だった。しかし彼の存在を許容することで、人々の間にある種の調和が生まれていたのだ。損得勘定なしに助けあう人間関係が、彼がいる限り存在した。彼が見返りなしに人々の役に立つことを喜ぶように、周囲の人々も彼の世話を焼くのは当然だと考えていた。とくに、女治療師のハズナはいつもそうしていた。

彼女は目が悪く、ぼんやりとしか見えないにもかかわらず、いつも誰よりも早く、ムファッディの服が破れ、サンダルがぼろぼろになつていのに気づき、どうやつてかは誰も分からないが、うまく彼のために新しいのを見つけてきてやつた。ある時、裕福な人間が一人、ムファッディに大事な用があるから、その日のうちにどうしても立ち寄つてくれと言つた。すると彼のために服やサンダルが用意されていた。まだ服もサンダルもまだ使えると言つてムファッディは拒んだけれども、事はこのように運んだのだ(五一〇頁)。

ムファッディはあいかわらず昔のままだったが、ハツランは一日として変化を止めることはなかった。かつて彼に新しい服やサンダルを当然のように与えていた多くの人々が、そうすることをやめた。なぜなら、ハツランに金があふれ、だれもがいくばくかの金を手にし、ただ金のためだけにここで働いているというのに、「ムファッディは金について何も知らず、それ

と関わることを拒み、そしてそれを軽蔑していたので、自分にとっての金の意味と他人にとっての金の意味に何の区別もしなかった」からだ(五三三頁)。

ムファッディは奇妙な変化を見せるようになった。無口な男だった彼が、そうではなくなつた。彼は根も葉もない人殺しのデマを流されて怒り狂い、通りの人々に向かったよう叫ぶ。

「ここにいる人は、いない人に伝えてくれ。ジェダンの息子(＝ムファッディ自身)は昔と変わらず、誰も裏切っていないし、誰も騙してなんかいない。奴はこの世に何も持たず、全能なる神以外の何ものも恐れはしない。ハッランの人々よ、金があんたたち以前にもたくさんものをだめにしてきた。人々も、そして王国も。金は人を奴隷にはするが、決して幸せを持つてきたりしない」(五二四頁)。

ハズナはその変化を誰よりも強く感じ、それが危険であることに気づいていた。彼が呪い、非難している人々はいまや、彼よりもはるかに大きな力を持つていたのだ。彼の口を封じようとする力が働き、彼は繰り返し投獄される。ハッランには初めて、刑務所というものができていた。ジャウハルは、初めこそ戸惑っていたものの、次第に何の疑問も感じずに、謂れない汚名を着せて、ムファッディを放り込むようになった。しかしムファッディは変わらなかつた。村で信望を集めるイブン・ナッファーという男が、彼の支えになつた。最後に獄から出たとき、ムファッディは治療師を止め石切り場で働くか、さもなければハッランを立ち去るように命じられた。しかし彼は応じなかつた。イブン・ナッファーのもとに身を寄せ、相

変わらず治療を続けた。

ハマダン・アル＝ラーイーはムファッディを毎日訪れた。彼はしゃべることができなかつたけれども、とても幸せそうだった。何か嬉しかったのかもしれないし、話さなくてもよかつたからなのかもしれない。しかし何かのせいで、彼の幸せは完全ではないように見えた。ムファッディは、それが彼の犬のせいだと見抜いた。犬がひどい病気になつていたので。すぐに犬を連れてくるように言った。アブー・オスマン(＝イブン・ナッファー)は犬を忌み嫌っており、いつもは家のそばにも来させなかつたし、自分の物には何も触らせはしなかつた。しかし彼は、治療のために犬を連れくるのを許した。ムファッディは犬の手当てをした。口を開き、喉に向かつてつばを吐き入れた。犬はくしゃみをし、よろめきながら走りだした。犬は元氣を取り戻していた(五二四―五二五頁)。

ムファッディは、かつて宿敵だったダブバーシーの足の痛みを治した。邪視によつて衰弱し、まったく物を食ふことができなくなつていた、ナウマ・ダフラツラの幼い息子を治療した。しかしそうした行為を見て、医師のスブヒーは「まずいことに巻き込まれた」と感じた。

対決、そして奇跡

ある日、ムファッディはイブン・ナッファーの家を出たままかえらなかつた。心配になつて探しに出かけたイブン・ナッファーは、彼が深手を負つて倒れているのを発見する。ムファッディはイブン・ナッファーに看取られて

息を引きとる。おそらくは、手を下したのはジャウハルだろう。しかしそれは最後まで、明らかにされえない。重要なのは、ムファッディの死が人々の間に大きな変化をもたらしたという事実である。

下手人は誰であろうと、人々の間では、彼の死はアメリカ人が引き起こしたのだと受けとめられた。イブン・ナッファーはこう言う。「ムファッディを殺したのはアメリカ人だ。やつらがすべての原因なんだ。やつらが諸悪の根源だ。」(五三七頁) 男たちは、誰もがそれに頷いた。

「やつらがやってきて、ハッランにあの穢れた足を最初に踏み入れたときから、俺たちはラクダの小便よりひどい状態になっている。日ごとに悪くなるばかりだ。」アメリカ人のキャンプを指差しながら、イブン・ナッファーはこう付け加えた。「俺は言った。お前たち全員に言ったはずだ。アメリカ人は厄病だ。災厄の原因だ。これまでに起きたことは、これから俺たちに降りかかろうとしていることに比べればなんでもない。いつかお前たちは(俺の死んだ後) こう言うだろう。『アブー・オスマンよ、安らかに眠ってくれ。お前の言ったことはすべて本当になってしまった』と。」

こうした話、ほとんど同じような話が、どの家でも、そしてキャンプでも語られた。男たちが怒りを込めて話し、そして呪い、女たちは黙ってそれを聞きながら涙を流した(五三七頁)。

人々は、かつてムファッディが瀕死の病人まで癒したように、彼自身もまた死の淵から戻ってくるような気がしていた。彼らからしてみれば、誰にもムファッディだけは殺せるはずなどなかったのだ。次々と不思議な出来事が起きる。始まりは、ムファッディが死んだ木曜日の正午のことだった。

市場や労働者のキャンプにいた多くの人々が、正午に強い振動を感じたと話した。漁師の一人もそう言った。石切り場にいた二人の労働者は、振動がものすごく、鶴嘴が手から落ちてしまったと言った。(茶店の主の) アブー・アスアドはカップを乗せた盆を落とし、すべて割れてしまった。どちらもまさに、正午に起きたのだ。ナウマ・ダフラッラは、息子がお腹がすいたから何か食べたいと言ったとき、嬉し涙を流した。しかしそれは悲しみをともなう喜びだった。ハムダンの犬は、それまで寝ていたのに、正午になると突然眼を覚まして吠え始めた(五三三頁)。

同じ時間に、海岸にいた子供たちは、大きな二頭のカモシカが海に跳ねていくのを見た。学校から帰る途中の子供たちは、男たちがイブン・ナッファーの家を走っているのを見かけ、立ち止まって眺めていると、鋭い叫び声が続いて、白い鳥の群れが窓からも戸口からも飛び立つのを目撃した。それは他のどんな鳥よりも大きく、彼らがそれまで見た一番大きな鳥だった。

競い合うかのように、人々は彼の葬儀に向かった。そして翌日の金曜日になっても、人々の振る舞いはいつもと違っていた。普段は金曜の集団礼拝にも大して人は集まらなかったが、その日は誰もが何かに掻き立てられたかのように、モスクへと向かった。

茶店に行く習慣のない男たちは、時間をもてあました。礼拝までまだまだ時間があった。そこで茶店に行き、なかには午後にもまた戻ってくる者もいた。だから茶店は終日いっぱいだった。正午の礼拝の時間になると、

皆が一斉に席を立った。それは今までなかったことだった。しかし、なにか不思議な感情とある種の願いが彼らの歩みを導き、すべきことを決定していた。いつもは礼拝になると逃げ隠れする男たちの中に、真つ先にモスクに駆けつけた者がいた。また中には、いつもは金曜の礼拝の呼びかけを疎んじていたのに、すぐに行くのがいいのか、それとも少し遅れていくのが好ましいのか、他の人に尋ねるほど熱心な者もいた（五三九頁）。

翌日の土曜日、ハッランはついに動き出す。エミールから、ムファッディ殺害の件については、これ以上調査をしないと通達が出た。それに続いて石油会社は、二三人の労働者の名前を挙げ、解雇を発表した。何の関連もないはずのこの二つの出来事は、しかし、人々の心の中でひとつになった。なぜ自分たちは罪もなく殺され、落ち度もなく職を奪われなければならないのか。解雇の対象とはならなかった労働者もが、抗議の意を表明して仕事に戻るのを拒んだ。重要なのは、会社からこのような通達が出たのが初めてではなく、以前、余剰人員を解雇したときには、アラブの労働者からなんの抵抗もなかったということだ。ジャウハルの死こそが、不正の在処を明らかにしたのだった。

彼らは今、仲間の労働者が使い捨てられるのを、黙って見ていることができなかつた。彼らは以前のように金のためだけに生きることを止めようとしている。彼らはデモを始めた。デモ隊は進んでいく先々で、喝采と拍手で迎えられた。デモ隊は、歌いながら歩き続けた。「ジャウハルよ、お前の上役に伝える。パイプラインを造つたのは猛獣だと。男たちは自分の権利を守る。アメリカ人のものなんかじゃない。この土地は俺たちのものだ」（五五〇頁）。彼らには、あのワーディー・ウユーンの主、ムトウイブ・ア

ルハザールがついているとも噂された。

彼らは不安だった。しかしそれでも彼らは、もし悲しみと怒りの感情に満たされていなくなつたら口にしなかつたであろうことをあえて言葉にした。なぜこんな風に生きなければならぬのだ？アメリカ人は違う生活をしているというのに。なぜアメリカ人居住区に行くことは妨げられるのだ？なぜアメリカ人の家に近づいたり、プールを眺めたり、木陰にほんの少しの間、立ち止まることさえ禁じられるのだろうか？アメリカ人はなぜ、犬を追い払うかのように、動け、すぐに立ち去れと叫ぶのだろうか？（番人の）ジュムアですら、誰かが「立ち入り禁止区」にいるのを見つけたら、鞭を振りかざしてすぐさま襲ってきた。そこら中に、立ち止まること、近づくことを禁止する立て札が立てられた。海でさえも、一定の距離を越えることを妨げる有刺鉄線が備えられた。

なぜアメリカ人は自分でしようとは思わない仕事を彼らにさせるのだ？彼らはただ黙って、満足しているだけなのに、アメリカ人は働き続けないと決して満足しない。

そしてエミールは、ほんとうに彼らのエミールなのか。彼らを護るのか、それともアメリカ人を護るのか。初めてハッランに来たころ、エミールは別人だった。市場を平気で歩きまわり、招かれて一緒にコーヒーを飲んだ者も大勢いた。しかしハサン・レダーイーが持つてきたあれらの機械が彼の心を占めると、彼はそれに夢中になり、なにかもジャウハルに任せてしまった。ジャウハルとは誰だ？アメリカ人の前ではやつは羊だ。何もしゃべらず、おとなしく聞いているだけだ（五五二―五五三頁）。

どれ程の怒りに燃えようと、人々は決して煽動には乗せられなかった。解雇の取り消しと、ムファッディ殺しの捜査だけを要求として掲げ続けた。人々はムファッディに届けとばかりに、歌声を上げた。「ムファッディよ、あんたの血は忘れない。ハッラン中がついている。北の丘の主よ。聞け。そして答えてくれ。ムファッディよ。あんたの流した血は、忘れ去られはしない」(五五四頁)。

翌日の日曜も、奇妙な一日だった。いつになく、夜明けの礼拝のときに、モスクはすでに人でいっぱいだった。モスクのイマームが来なかったため、代わりにイブン・ナッファーが礼拝の導師役をやることになった。その場を利用して、彼は人々に語りかける。

彼は、礼拝がイスラム教徒の義務ならば、不正に抵抗することも同じく義務であると断言した。さらに言った。イスラム教徒の同胞を守ることは、イスラム教徒の義務であり、その権利と土地を守ることも同じだ。団結にこそ力がある。兄弟愛に基づく集団は決して負かされない。しかしもしも人々が分裂し、自分の思惑や気まぐれが混じれば、それで終わりだ。彼はいろいろと語った。彼はコーランから章句を注意深く選んで、はつきりとした抑揚のある調子で朗誦してみせた。それらは集まった人々の心に深く浸透し、大きく動かしした。人々は、あたかもまったく新しい、違う類の人間に生まれ変わったかのように感じた。

礼拝の後、多くの人々が、頭の上に天使がいるのを感じたと言った。イブン・ナッファーが(礼拝の最後に)「平安と神の加護、お恵みがありますように」と言ったとき、まるで稲妻のような、何か強い白い光がモスク全体を満たしていたと言う者もいた(五六一―五六二頁)。

その日の午後、銃声が鳴り響いた。小競り合いから、一部の労働者にジャウハルが発砲したのだ。人々は手当たり次第に、石や木やパイプを持って駆けつけた。女たちもその場に留まっではいられず、ハズナは人々に向かって叫び続けた。「神が力をお与えになりますように。勝利を与えてくださいますように」と。ジャウハルとその部下が人々と向き合う形になった。押し問答が続いた後、イブン・ナッファーが撃たれた。彼は傷を負った。その時だった。人々は一齐にジャウハルとその部下に襲い掛かる。ジャウハルは、武器を持った自分の兵士たちが後退し、逃げ始めたのを見て、我が目を信じることができなかった。

このとき再び、人々は不思議な体験をする。対決の瞬間、ムトウイブ・アル||ハザールの息子たちが駆けつけ、鳥のように人々の頭上を飛んだ。ムトウイブ・アル||ハザール本人の姿を見かけたと言う者もいた。そして何よりも、ムファッディの姿は、ハッランの人々すべてに目撃されたのだ。

何人かが、ムファッディ・アル||ジェダーンそっくりな人間の形をした幻が頭の上に現れたのを見たと言った。彼らが言うには、発砲していた(ジャウハルの)兵士たちは怯えきり、叫びながら、ほとんどの弾をムファッディの幽霊に向かって発砲して、男の服は銃弾で穴だらけになっていたというのだ(五七二頁)。

ハズナは男たちに包帯をした後、微笑んだ。うれしそうに歯を見せて、こう言った。「神と誰もが知るあの男に感謝します。みんな、新しい命を与えられたのだから。」

誰も彼女がムファッディのことを言っているのだと分かった。その夜、ムファッディは数え切れない人々の前に姿を現した。彼はアラブのハッランからモスクまで行ったり来たりしたので、彼の服が銃弾で穴が開いていることに気づかない者は一人もいなかった。そのうち三人は、労働者とハッランの住人二人だったが、服を触り、穴の端が焦げているのを見たと言った。彼らが服を触って不思議がっているのを見て、ムファッディは笑いながら、新しいのをもらわなければと言ったという（五七四頁）。

結局、エミールとその取り巻きは、エミールの療養を理由に、ハッランから立ち去った。エミールはハッランを後にする車の中でも、あいかわらず、お気に入りの電話機をいじっている。間もなく、エミールからの通達が発表された。すべての労働者の復職と、「最近の事件」の調査が約束された。これで『塩の町―荒野』は幕を閉じる。

「アメリカ」対「聖者」

戯画化されたエミールの姿は、ムニーフが意図したのが、アメリカ人やアメリカ的なるものの批判よりも、アメリカのもたらした富に目がくらみ、本来の使命を忘れ去った権力者やその取り巻きに対する批判であること明らかにしている。物語のなかに、土地の人々とアメリカ人の間に実質的な意思疎通はまったく言っていないほどなく、アメリカ人、あるいは「会社」の意思が一方的に伝えられるだけだ。エミールとその取り巻きが間に入ることによって、かえって地元のアラブ人とアメリカ人の間に理解が成立するのを妨げている。

しかしそれでもなお、問題がアメリカ人の侵入によって発生したとされていることに変わりはない。イブン・ナッファーは、「アメリカ人のせいだ」と繰り返し返した。アメリカ人が壊したのは、古きよき時代のアラブの男、ムトゥイブ・アルハザールの生き方であり、またそれ以上に、ムファッディ・アルジェダーンの信じた価値であった。アメリカ人がやってくることによって、金のためだけに生きる生き方が支配的になった。ムファッディのように持てるものを分け与え、敵であっても苦しむ相手に手を差し伸べるなど考えられなくなった。誰もが少しでも多くの金を手に入れることだけを考え、誇りを捨て、惨めな境遇に自ら進んで身を落すようになったのは、アメリカ人がやってきてからだった。

ムファッディという男が、聖者のような描き方をされているのは偶然ではない。彼の死の意味の大きさは、茶店や石切り場での不思議な出来事、そして子供たちの見た不思議な光景として、人々に直観される。子供たちが見る白い鳥は、神秘家まつわる物語の中に登場する、天に向かう白い鳥を思わせる。また、治療師としての彼の癒しは、聖者の起こす奇跡に近い。彼は敵の男の足の怪我を治すが、医師のスプヒーにはどうしても治せなかったものだ。邪視に呪われた子供を救ったのは言うまでもない。口をきくことのできない男の悲しみを察知し、その原因を見抜くことができたのも彼だけだった。彼の与えるのは身体の癒しだけでなく、心の救いでもあった。「金について何も知らず、それと関わることを拒み、そしてそれを軽蔑していた」男、狩りの獲物を自分には何も残さず他人に与えてしまう男、アメリカ人の論理とは正反対の価値を信じた男が聖者になる。

「アメリカ」という記号

イドリースも、ムニーフも、アメリカそのものを描こうとしているのではないことは明らかである。どちらの場合にも登場するのは、金のためなら売春さえ厭わない女性であるか、アラブと見ると写真を撮って面白がったかと思うと、野良犬のように追い払い、怠け者と一蹴するようなビジネスマンであり、単なるステレオタイプにすぎない。そこには、アメリカとはなにかという問いはなく、彼らの社会に脅威を与えるものとして、そして彼らの生きかたを力づくで変えようとするものとしてのみアメリカは登場する。

間接的なものを含めれば、アメリカとの出会いは、一人ひとりのアラブ人が何らかの形で経験しているはずだ。それは、驚愕や憧れなどの感情が入り混じった経験であろう。自分たちの生き方を破壊する危険な力をそこに感じるとともに、強烈な魅力を見出すこともあるはずだ。しかしどちらの作品でも、アメリカのもたらした影響は、完全に否定的な評価しか与えられない。アメリカが誇る物質的な豊かさ、技術の先進性すらも、人間にとって究極的な意味を持たないものとして、その意味は相対化されてしまう。

これら二つの作品を支配しているのは、アメリカとの出会いによって、アラブの人々が自己像を再確認し、アメリカが体現する価値に対して、態度決定を迫られているというその切迫感である。アラブとはどのような価値に基づいて生きる人間であり、何に対して頑ななまでに否と言わなければならぬか。それを見極める作業のなかに、アメリカは試金石として

配置されている。そのときのアメリカは、血の通った人間の集まりでもなければ、そうした人間の作りあげた具体的な価値観や世界観ですらなく、近代文明の見せる最悪の顔でしかない。ハッランのアメリカ人たちはほとんど名前を与えられることなく、複数形の「アメリカ人」として登場し、ニューヨークの娼婦は名前を聞かれることすらない。